

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

第13回 現在の業務に「没頭」すると医療の変化俯瞰できない

新しい調剤報酬制度が始まって少し時間が経ちました。いろいろと事前に言われてはいたけれど、毎日の業務については、それほど大きな変化はない、と感じておられる先生も多いのではないのでしょうか。

**「現場で実感する正しさ」盾に変化に目をつぶる
薬剤師や薬局の在り方考える上で自戒すべきこと**

そもそも高齢化が進み、地域医療が変わるといっても、外来患者さんがいなくなるわけではありません。処方箋を応需して疑義があれば解消し、正確・迅速に調剤して、正しい服薬指導とともにお薬をお渡するという薬剤師の業務は、今後も必要なものです。また、それら一連の出来事を薬歴に記載して、適正な保険請求を行うということは、営利・非営利、あるいは医療以外のところでも、そのサービスの持続性を担保していくためには非常に重要なことです。

しかし、この「現場で実感する正しさ」を盾に、現在、わが国に起こっている医療業界全体の大きな変化に目をつぶるとするのは、これからの薬剤師や薬局の在り方を考える上で、ちょっと気をつけなくては行けないと、自戒を込めて思います。

というのも私自身、医師として患者さんを診察し、レントゲンや採血などの検査結果も参考にして、いろいろと考えた後に病名診断を下し、それらに則って治療を行い、その後の経過が改善に向かうという作業には、この「現場で実感する正しさ」感に満ちあふれています。そのため「医療費の適正化」とか「地域包括ケア」という考え方は、医師にとっても、どうしてもマスクされがちだと思うのです。

目の前のことに夢中になることを「没頭」と言いますが、この言葉は、基本的に良い意味で使われることが多いのではないかと思います。しかし、現在の医療業界において目の前の患者さんに「没頭」してしまうと、医療全体の変化が俯瞰できず、結果的に正しくない選

択をしてしまう危険性が、業種を問わず存在すると思います。

その一方で、現状の仕事とわが国が将来向かうべきビジョンとの間には、少なからずギャップがあります。特に薬局薬剤師にとっては、毎日の外来処方箋に対する調剤業務と「地域包括ケア」や「かかりつけ薬剤師」、さらには以前からも言われている「セルフメディケーション」といったキーワードは、あまり真実味があるものとして捉えづらい面があるのではないのでしょうか。さらに、昨今よく言われることですが、「かかりつけ薬剤師」の要件の難しさを考えると、心折れてしまうこともあり得ます。

そうすると、現実とビジョンのギャップを乗り越えようとする気力はそがれてしまうのですが、さらに、それに拍車をかけるのが目の前の患者さんに「没頭」することで、周囲の状況やトレンドが見えなくなるのではないのでしょうか。

**逆算的に現状の制度や法律の変化を見ると
あるべき姿のシンプルな方向性が見えてくる**

しかし今、日本の医療は大きく変わりつつあります。特に、薬学教育が4年制から6年制へと移行した薬剤師、さらにはその活躍の場である薬局の在り方は、まさにドラスティックに変わりつつあります。その変化に対応するためには、現在の薬剤師や薬局の在り方から積み上げ式に考えようとせず、医療全体を俯瞰して、あるべき姿はどういうものかを考えた上で、逆算的に現状の制度や法律の変化を見てみると、「医療従事者としての薬剤師はどうあるべきか」という命題に対しての意外にシンプルな方向性が見えてくるはずですよ。

そして、そうやって俯瞰する余裕を手に入れるためには、目の前の患者さんに集中して業務にあたりつつ、「没頭」して周囲の状況変化を見誤ることがないように気をつけたいと思います。